

英語の法助動詞表現

— 小説 *Tess of the d'Urbervilles* と映画 *Tess* の場合 —

宝 壺 貴 之

〔抄録〕

一般に叙述内容に対する話者の心的態度を表す表現を「法性」という。F. R. Palmer は、*Modality and the English Modals* 第2版 (1979) の中で、法性を Epistemic Modality (認識の法性) と Deontic Modality (義務の法性) と Dynamic Modality (起動の法性) の3種類に分けている。また、前川 (1996) (『英語動詞の叙法と法性 (2)』『文学部論集』80号, 佛教大学) によると、F. R. Palmer の3種の各範疇の下に、necessity と possibility の下位区分を設けることができる。以下この分類に従って、トマス・ハーディの小説 *Tess of the d'Urbervilles* (1891) と、その小説に基づいて1979年にイギリス・フランス合作で作られた映画 *Tess* とに於ける法助動詞 *can*, *may*, *must* を法性の立場から考察し、その用法の頻度数を Geoffrey Leech 教授の *Meaning and the English Verb* 第2版 (1987) に示唆されている頻度数と比較する。

キーワード 法助動詞, 認識の法性, 義務の法性, 起動の法性

1 Epistemic Modality

Epistemic Modality (認識の法性) を取り上げる。Epistemic Modality を表す法助動詞のうち、*must* が necessity (必然性) を、*may* と *can* が, possibility (可能性) を表す。

1-1 Necessity

must

Do ye know that there is a very rich Mrs d'Urberville living on the outskirts o' The Chase, who *must* be our relation? ⁽¹⁾

この場面はテスの母親がテスに、にセダーバヴィル家へ、それとは知らずに、親戚の名乗り

をあげに行くように言っている場面である。「ご獵林のはずれに住んでいるダーバヴィル夫人というとてもお金持ちの奥様はうちの親戚筋になるにちがいないんだよ。」と母親の判断が、Epistemic necessity の *must* で表現されている。

1-2 Possibility

may

JOHN: Good night t'ee.

PARSON: Good night, Sir John.

JOHN: Begging your pardon, sir!

JOHN: We met on this self-same road t'other day, and I said 'Good night' and you replied 'Good night, Sir John'.

PARSON: I ⁽²⁾may have.

これは、テスの父親がある時郷土史に興味をもつ好事家の牧師から、自分が今は亡びたと考えられている古い貴族ダーバヴィル家の末裔であることを伝えられる場面である。テスの父親が牧師に“Sir, John”と呼びかけられて、先日もこの牧師に“Sir, John”と言われたことを思い出し、牧師は「そう言ったかもしれない」と答える場面である。牧師の認識の表現がEpistemic possibility の *may* で表現されている。

can

'My life ⁽³⁾can only be a question of a few weeks.'

これは物語の最後の場面で、テスが言った言葉である。殺人を犯したテスがやがて捕らえられ処刑される可能性があることは、誰の目にも明らかである。そのテスの命があと2、3週間しか続かないかもしれないとのテスの判断を、Epistemic possibility の *can* で表現している。

ここでEpistemic possibility の *can* と *may* の相違について考察する。Leech 教授は、*Towards a Semantic Description of English* (1969) に於いて、*can* は一般的理論的判断であるのに対して *may* は個別的実際的判断を表すということを、次の二つの例に、それぞれをパラフレイズした文によって説明している。即ち、The Monsoon *can* be dangerous. と The Monsoon *may* be dangerous. に於いて、前者の *can* の表現は、It is possible for the Monsoon to be dangerous. とパラフレイズでき、後者の *may* の表現は、It is possible that the Monsoon is/will be dangerous. とパラフレイズできることを指摘した上で、*may* による表現の方が少し意味が強くなるようであると述べている。(2) と (3) の引用文を比較しても、この違いは明らかである。

2 Deontic Modality

次に、Deontic Modality (義務の法性) を取り上げる。Deontic Modality を表す法助動詞のうち *must* が necessity (必然性) を、*may* と *can* が possibility (可能性) を表す。

2-1 Necessity

must

JOAN: If they were in need I should take 'em in wi'out a word.

We all have to take the ups with the downs, Tess. You *must* go to see her and ask for some help in our trouble.⁽⁴⁾

この場面は、(1) と同じ場面で母親がテスに、うちの親戚筋のダーバヴィル夫人のところへ行って、うちが困っているのを助けてくださるよう、テスに頼みに行ってくれと言っている場面である。ジョウンの意図が、Deontic necessity の *must* で表現されている。Deontic Modality の必然性は、この場合のように、実質的に「命令」(command) を意味する場合が多い。

次に、Deontic possibility を表す例は (5) と (6) になる。この Deontic possibility を表す場合は、普通「許可」(permission) を与えることであるが、「許可」が実質的には「命令」(command) である場合も多い。

2-2 Possibility

Permission または Command を表す。

may

Both return to the carriage.

TESS: *May* I write to you?

ANGEL: Oh-yes. If you're ill or in need of anything.⁽⁵⁾

この場面は、テスが自分の過去を結婚式の夜に夫のエンジェル・クレアに告白し、テスの過去を許すことのできないエンジェルが、どうしてもテスを英国に残してブラジルへ行くと言い張る場面である。テスは、「手紙を差し上げるのはいいでしょうか？」とエンジェルに許可を伺っているのが、Deontic possibility の *may* で表現されている。

can

'You *can* try your hand upon she,' he pursued, nodding to the nearest cow.⁽⁶⁾

この場面は、テスがトールボトヘイズ酪農場で仕事を始める場面である。農場主のクリック

氏は、テストに乳しぼりができるかどうかを尋ね、「試しにそこにいる牛の乳をしぼってみな」という場面である。クリック氏の意図は「許可」というより実質的に「命令」になっている。

3 Dynamic Modality

最後に、Dynamic Modality (起動の法性) を取り上げる。ところで、「主語の能力」を表す *can* は、話者の「心的態度」(attitude) とともに、話者の「意見」(opinion) とに関わり合いがないので非法的ではあるが、「主語の能力についての話者の表現である」という点で、Dynamic Modality (起動の法性) を表す。Dynamic Modality の法性は、話者の関わり合いの殆どない ‘You *must* go if you wish to catch the bus.’ 等「環境による法性」(circumstantial modality) と ‘He’ll come, if you ask him.’ 等「主語本位の法性」(Subject-oriented modality) を含む。例えば、‘You *may* smoke in here.’ (ここでタバコを吸ってもいい。) は、Deontic Modality を表すが、‘You *can* smoke in here.’ (ここならタバコが吸える。) は Dynamic Modality の中の「環境による法性」を表す。この点について、Leech 教授は *Towards a Semantic Description of English* (1969) の中で、*can* がある特定の人物の判断ではなく、社会的権威や環境から、可能性が与えられるのに対して、*may* は話者自身の判断で許可が与えられるということを、‘You *may* smoke in here.’ に対して、A: Can we smoke in here? B: As far as I know you *can* smoke. there’s no notice to the contrary. という文で説明している。

Dynamic Modality を表す法助動詞のうち、*must* が環境による necessity (必然性) を表し、*may* が環境による possibility を、*can* が環境による possibility と主語本位の possibility を表す。

3-1 Necessity

must

I *must* cry to you in my trouble—I have no one else... I think I *must* die if you do not come soon, or tell me to come to you... Please, please not to be just; only a little kind to me! ⁽⁷⁾

この場面は、自分の態度があまりにもかたくなだったことを反省して、ブラジルから帰国したエンジェルが、以前テストがプリントコム・アッシュから出して、転送されてきた古い手紙を捜し出し、読みなおす場面である。(7) はこれらの手紙の一つの内容で、病氣やまさかの時以外には手紙も禁じられていたテストが、ブラジルにいるエンジェルにすぐに帰ってきてほしいという気持ちを伝えている。テストが、「すぐ訴えなければならない。—もしあなたがすぐ来てくださるか、あたしに来るようになってもらえないなら死ななければならない。」と、環境や条件からそうならざるを得ないということを「環境からくる necessity」を表す modality で表現している。

'Why should we put an end to all that's sweet and lovely!' she deprecated.

'What *must* come will come.'⁽⁸⁾

これはエンジェルとテスが再会することができ、ニュー・フォレストを北上して逃げる途中に空き家を隠れ家として、二人の最初で最後の結婚生活をしていたテスが述べた言葉である。アレックを殺してしまったテスは逮捕されるのは時間の問題であり、残されたわずかな時間をエンジェルと過ごしたいという場面である。テスは「来たるべきものは、どうしたって来るんです。」と自分の意志とは関係なく来る運命について述べている言葉が、環境による Dynamic necessity の *must* で表現されている。

3-2 Possibility

Dynamic possibility の *can* は「環境による法性」(circumstantial modality) の場合は「可能性」を表し、「主語本位の法性」(subject-oriented modality) の場合は「主語の能力」(Subject's ability) を表す。

can

To-morrow is Sunday, thank God, and we *can* sleep it off in church-time. Now, have a turn with me?⁽⁹⁾

これは、トラントリッジの人々が週末に酒を飲みダンスをしにチェイズバラへ行く風習があって、テスも年上の女性たちに誘われてやむなく行くことになった場面である。そこでテスに目をつけた若い男が、テスに明日は日曜日だから人が、教会に行っている間を、寝て過ごせるからもうひと踊りしようと、誘っているところである。主語 *we* の心的態度ではないが、翌日が日曜日で人が教会に行っている間に眠ることが、環境上可能であることを環境による Dynamic possibility を表す *can* で表現している。

MRS D'URBERVILLE: Ah, this is Strut. He doesn't seem so lively today, does he? He's alarmed at being handled by a stranger, I suppose. And Phena too ... Yes, they are a little frightened—aren't you, my dears? Never mind, they'll soon get used to you. *Can* you whistle?⁽¹⁰⁾

この場面は、テスがダーバヴィル家で鶏の世話をする仕事に就くことになり、鳥小屋でダーバヴィル夫人がテスに説明をしている場面である。鳥の世話をするのに必要なので、「口笛が吹けますか?」とテスの能力を尋ねている。Dynamic possibility の「主語の能力」を表す *can* で表現されている。

may

In the valley beneath lay the city they had just left, its more prominent buildings showing

as in an isometric drawing—among them the broad cathedral tower,...and, more to the right, the tower and gables of the ancient hospice, where to this day the pilgrim *may* receive his dole of bread and ale.⁹⁹

これは小説の最後の場面で、テスが処刑される日にエンジェルとテスの妹のライザ・ルーは「西の丘」の頂上へつきかけていたところである。(11) では、丘からの眺めが描写されていて、宿坊では巡礼者に対してパンやビールの施しを受けられるということが、環境による Dynamic possibility の *may* で表現されている。

ここまで、法助動詞 *can*, *may*, *must* の法性について、小説 *Tess of the d'Urbervilles* と映画 *Tess* の場合を考察した。次にまとめとして小説 *Tess of the d'Urbervilles* と映画 *Tess* に於けるすべての *can*, *may*, *must* の用法別の頻度数を Leech 教授の *Meaning and the English Verb* (1987²) に示唆されている頻度数と比較考察したい。以下の八つの表については、小説と映画に於いてそれぞれ表 1 と表 3 が総数を、表 2 と表 4 がパーセンテージを表し、また表 5 と表 6 が小説の地の文と会話文に於ける総数を、表 7 と表 8 が映画のト書と会話文に於ける総数を表す。

表 1 Number of the Modals *can*, *may*, *must* in Hardy's *Tess of the d'Urbervilles*

modal modality		A) can	B) may *mid	C) must
Episte.	P	28	177	—
Episte.	N	—	—	27
Deontic	P	15	26	—
Deontic	N	—	—	53
Dynamic	P	501	23	—
Dynamic	N	—	—	17
Non-Mod.	A	55	—	—
Non-Mod.	S	5	18	—
Non-Mod.	O	—	5	—

P = Possibility N = Necessity A = Ability

S = Subjunctive Equivalent O = Optative Sentence

Episte. = Epistemic Non-Mod. = Non-Modal

* *Mid* is included in the *may* category, as is defined and given examples by O. E. D.:

mid: dial. pronunciation of *might*, pa.t. of *may*.

1891 T. Hardy *Tess* I. iii You *mid* last ten years;

you *mid* go off in ten months, or ten days. (O. E. D. s. v. *mid*)

表 2 Figures in Percentage in *Tess of the d'Urbervilles*

modal modality		A) can	B) may *mid	C) must
Episte.	P	4.0%	71.0%	—
Episte.	N	—	—	27.8%
Deontic	P	2.1%	10.4%	—
Deontic	N	—	—	54.6%
Dynamic	P	62.0%	9.2%	—
Dynamic	N	—	—	17.6%
Non-Mod.	A	31.2%	—	—
Non-Mod.	S	0.7%	7.2%	—
Non-Mod.	O	—	2.0%	—

表 3 Number of the Modals *can, may, must* in *Tess*

modal modality		A) can	B) may	C) must
Episte.	P	9	11	—
Episte.	N	—	—	6
Deontic	P	4	3	—
Deontic	N	—	—	15
Dynamic	P	53	1	—
Dynamic	N	—	—	—
Non-Mod.	A	17	—	—
Non-Mod.	S	2	—	—
Non-Mod.	O	—	—	—

表 4 Figures in Percentage in *Tess*

modal modality		A) can	B) may	C) must
Episte.	P	10.6%	73.4%	—
Episte.	N	—	—	28.6%
Deontic	P	4.7%	20.0%	—
Deontic	N	—	—	71.4%
Dynamic	P	62.4%	6.6%	—
Dynamic	N	—	—	—
Non-Mod.	A	20.0%	—	—
Non-Mod.	S	2.3%	—	—
Non-Mod.	O	—	—	—

表 5 (地の文) Number of the Modals *can, may, must* in Hardy's *Tess of the d'Urbervilles*

modal modality		A) can	B) may *mid	C) must
Episte.	P	21	137	—
Episte.	N	—	—	14
Deontic	P	3	10	—
Deontic	N	—	—	3
Dynamic	P	301	15	—
Dynamic	N	—	—	6
Non-Mod.	A	29	—	—
Non-Mod.	S	5	6	—
Non-Mod.	O	—	—	—

表 6 (会話文) Number of the Modals *can, may, must* in Hardy's *Tess of the d'Urbervilles*

modal modality		A) can	B) may *mid	C) must
Episte.	P	7	40	—
Episte.	N	—	—	13
Deontic	P	12	16	—
Deontic	N	—	—	50
Dynamic	P	200	8	—
Dynamic	N	—	—	11
Non-Mod.	A	26	—	—
Non-Mod.	S	—	12	—
Non-Mod.	O	—	5	—

表 7 (卜書) Number of the Modals *can, may, must* in *Tess*

modal modality		A) can	B) may	C) must
Episte.	P	1	1	—
Episte.	N	—	—	1
Deontic	P	—	—	—
Deontic	N	—	—	—
Dynamic	P	15	—	—
Dynamic	N	—	—	—
Non-Mod.	A	5	—	—
Non-Mod.	S	—	—	—
Non-Mod.	O	—	—	—

表 8 (会話文) Number of the Modals *can, may, must* in *Tess*

modal modality		A) can	B) may	C) must
Episte.	P	8	10	—
Episte.	N	—	—	5
Deontic	P	4	3	—
Deontic	N	—	—	15
Dynamic	P	38	1	—
Dynamic	N	—	—	—
Non-Mod.	A	12	—	—
Non-Mod.	S	2	—	—
Non-Mod.	O	—	—	—

Leech 教授の用語では、Epistemic possibility と Dynamic possibility とを合わせたものを Possibility と、Epistemic necessity のことを Logical necessity (論理的必然性)、Deontic possibility のことを Permission (許可)、Deontic necessity のことを, Obligation (義務) or Requirement (要求)、Dynamic ability のことを Ability と呼んでいる。

第一に、表 2 と表 4 に於いて、*can* の Possibility は、小説では 66.0%、映画では 73.0%、Ability については、小説では 31.2%、映画では 20.0%、Permission については、小説では 2.1%、映画では 4.7% となる。これは Leech 教授が *can* の Possibility は very common で、Ability は common、Permission は less common であると頻度数について述べているのと、小説の場合も映画の場合も一致している。同様に *may* の Possibility は、小説では 80.2%、映画では 80.0% となり、Permission については、小説では 10.4%、映画では 20.0% となり、Leech 教授が Possibility を common、Permission を rather rare としているのに相当する。また *must* の Obligation or Requirement については、小説では 54.6%、映画では 71.4%、Logical necessity については、小説では 45.4%、映画では 28.6% となる。映画では多少差が出たものの、Obligation or Requirement と Logical necessity が common であると Leech 教授が述べていることに一致する。つまり、小説 *Tess of the d'Urbervilles* と映画 *Tess* のすべての *can, may, must* を分析することによって得た結果と、Leech 教授が用法の頻度数に関して述べていることとがほぼ一致し、相関関係があることが、前半の四つの表から分かった。

第二に、小説と映画に於ける表現の相違について考察する。全体数が映画より小説の方が多いのは Written English である小説には地の文があり、Spoken English である映画にはト書きはあるものの、地の文がないことに起因している。これは表 5 と表 6 より明かである。また小説と映画に於ける法助動詞表現の頻度数の相違で興味深いのは、Dynamic Modality の *may* と *must* である。環境による Dynamic Modality の *may* や *must* が、映画では *may* 1 例しかないのに

対して小説では *may* は23例, *must* は17例ある。

第三に、小説の地の文と会話文に於ける法助動詞の頻度数は、表5と表6に示してあるが、Epistemic modality については、*can*, *may*, *must* 共に会話文より地の文の方が多いが、*must* は差が少なくほぼ同数である。これは、著者が登場人物や背景について認識する表現だからである。Deontic modality については、*can*, *may*, *must* 共に会話文の方が地の文よりも多いが、これは登場人物が会話で許可を与えたりする場面が多いからである。Dynamic modality については、*can* と *may* は地の文の方が多く、*must* は会話文の方が多い。これは、Dynamic modality の *can* と *may* はモダリティーというより客観的事実の描写に近いからで、Dynamic modality の *must* はすべて環境からくる necessity を表すものだからである。また映画のト書と会話文に於ける法助動詞の頻度数については、表7と表8に示してあるが、ト書には Epistemic modality は各1例しかなく、Deontic modality については0である。つまり映画ではト書の部分には殆ど法助動詞は表れないで、Dynamic modality の *can* だけがよくみられることが表7と表8より考察することができる。これは、小説の場合の理由と同様で、Dynamic modality の *can* はモダリティーというより客観的事実の描写に近いからである。

以上、小説と映画に於ける法助動詞 *can*, *may*, *must* の法性について考察し、Leech 教授が述べている頻度数との相関関係について考察することができた。ただ、Leech 教授は頻度数に関して Epistemic Modality と Dynamic Modality を合わせて表記しているため、この両者の違いに関する頻度数を Leech 教授の研究と比較することはできなかった。

注

- (1) Hardy, Thomas (1978), *Tess of the d'Urbervilles: A Pure Woman*. First published by Macmillan 1891. Published in the Penguin English Library 1978. London: Penguin Books. p.74.
- (2) Brach, Gerard; Polanski, Roman; and Brownjohn, John (1979). *Tess Based on the novel by Thomas Hardy* (1891) London: Burill. p.2.
- (3) Hardy, *Tess of the d'Urbervilles: A Pure Woman*. p.482.
- (4) Brach, *Tess*. p.12.
- (5) Brach, *Tess*. p.87.
- (6) Hardy, *Tess of the d'Urbervilles: A Pure Woman*. p.162.
- (7) Hardy, *Tess of the d'Urbervilles: A Pure Woman*. p.456.
- (8) Hardy, *Tess of the d'Urbervilles: A Pure Woman*. p.481.
- (9) Hardy, *Tess of the d'Urbervilles: A Pure Woman*. p.108.
- (10) Brach, *Tess*. pp.27A-28
- (11) Hardy, *Tess of the d'Urbervilles: A Pure Woman*. p.489.

BIBLIOGRAPHY

- 1 Brach, Gerard; Polanski, Roman; and Brownjohn, John (1979). *Tess Based on the novel by Thomas Hardy* (1891) London: Burill.

- 2 Ehrman, Madeline (1966), *The Meanings of the Modals in Present-Day American English*. The Hague: Mouton.
- 3 Elliott, Ralph W. V. (1984), *Thomas Hardy's English*. Oxford: Basil Blackwell.
- 4 Hardy, Thomas (1978), *Tess of the d'Urbervilles: A Pure Woman*. First published by Macmillan 1891. Published in the Penguin English Library 1978. London: Penguin Books.
- 5 Joos, Martin. (1968), *The English Verb: Form and Meanings*. 2nd edn. London: the University of Wisconsin Press.
- 6 Kouzou, Nakano. (1993), *The Semantics of the English Modal Auxiliaries*. Tokyo: Eichousha.
- 7 Leech, Geoffrey N. (1969), *Towards a Semantic Description of English*. London: Longman.
- 8 Leech, Geoffrey N. (1987), *Meaning and the English Verb*. 2nd edn. Harlow: Longman.
- 9 Palmer, F. R. (1979), *Modality and the English Modals*. 2nd edn. Harlow: Longman.
- 10 Palmer, F. R. (1986), *Mood and Modality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 11 Perkins, R. Michael. (1983), *Modal Expressions in English*. New Jersey: Ablex Publishing Corporation.
- 12 Tetsuwo, Mekawa. and Yasushige, Ishikawa. (1992) 'Modality in the English Modals', *Memoirs of the Faculty of Education, Shiga University* No.42, 1-12.

Dictionary

The Oxford English Dictionary on Historical Principles [O. E. D.]

(ほうこ たかゆき 文学研究科英米文学専攻博士後期課程) 1997年10月16日受理

